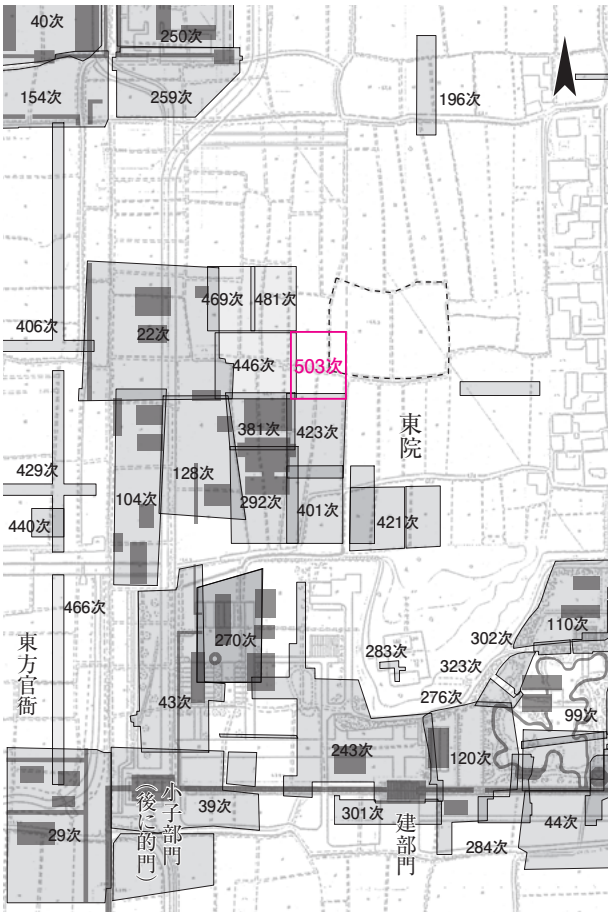
東院地区の調査
―第503次

1　はじめに

平城宮は、その東辺に東西約250m、南北約750mの張り出し部をもち、その南半約350mの範囲を東院地区とよんでいる。『続日本紀』などの文献から、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られる。天平勝宝６年（754）の「東院」、神護景雲元年（767）に完成した「東院玉殿」や宝亀４年（773）に完成した「楊梅宮」は、この地にあったと考えられている。

2006年度以降は、東院中枢部と推定される地域の調査を重点的におこなっており、2012年度もこの一環として、第423次調査区（2007年度）の北、第446次調査区（2009年度）の東に調査区を設定した（図Ⅲ-２）。調査対象面積は1,015㎡（東西29m×南北35m）で新規調査面積は832㎡である。調査は2012年12月17日に開始し、2013年５月22日に埋戻しを完了した。



図Ⅲ-２　第503次調査区位置図　1：2000

2　周辺の調査成果

本調査区の南および南東に位置する第401・421・423次調査区では複数時期の四面廂建物や回廊を検出しており、ある時期の東院中枢部を構成する建物や区画施設である可能性が指摘されている[1・2]。第421・423次調査では柱筋をそろえる長大な南北棟建物を検出しており、本調査区に続く。本調査区の西にあたる第446次調査区では、東西道路や東西塀を確認し、これらの遺構を境に空間が南北に分かれる可能性が示された[3]。さらに、調査区北西に位置する第469・481次調査では、東院西北部に比較的小規模な建物が展開すること、出土遺物などから東院中枢部のバックヤードにあたる性格をもつことが指摘された[4・5]。

また、第446・469次調査では、東院西北部の遺構変遷について、第421・423次調査までの５期区分から、６期に区分する新たな変遷案を提示した。第481次調査では区画施設の変遷から、１～３期までの建物配置が４期に東西道路を廃して東西塀により区画する異なる配置をとること、５期には建物配置の大きな改変をおこない、６期に南北80尺の区画が並ぶ整然とした建物配置をとるようになるとして、東院地区の空間利用の変遷についての整理がなされている。

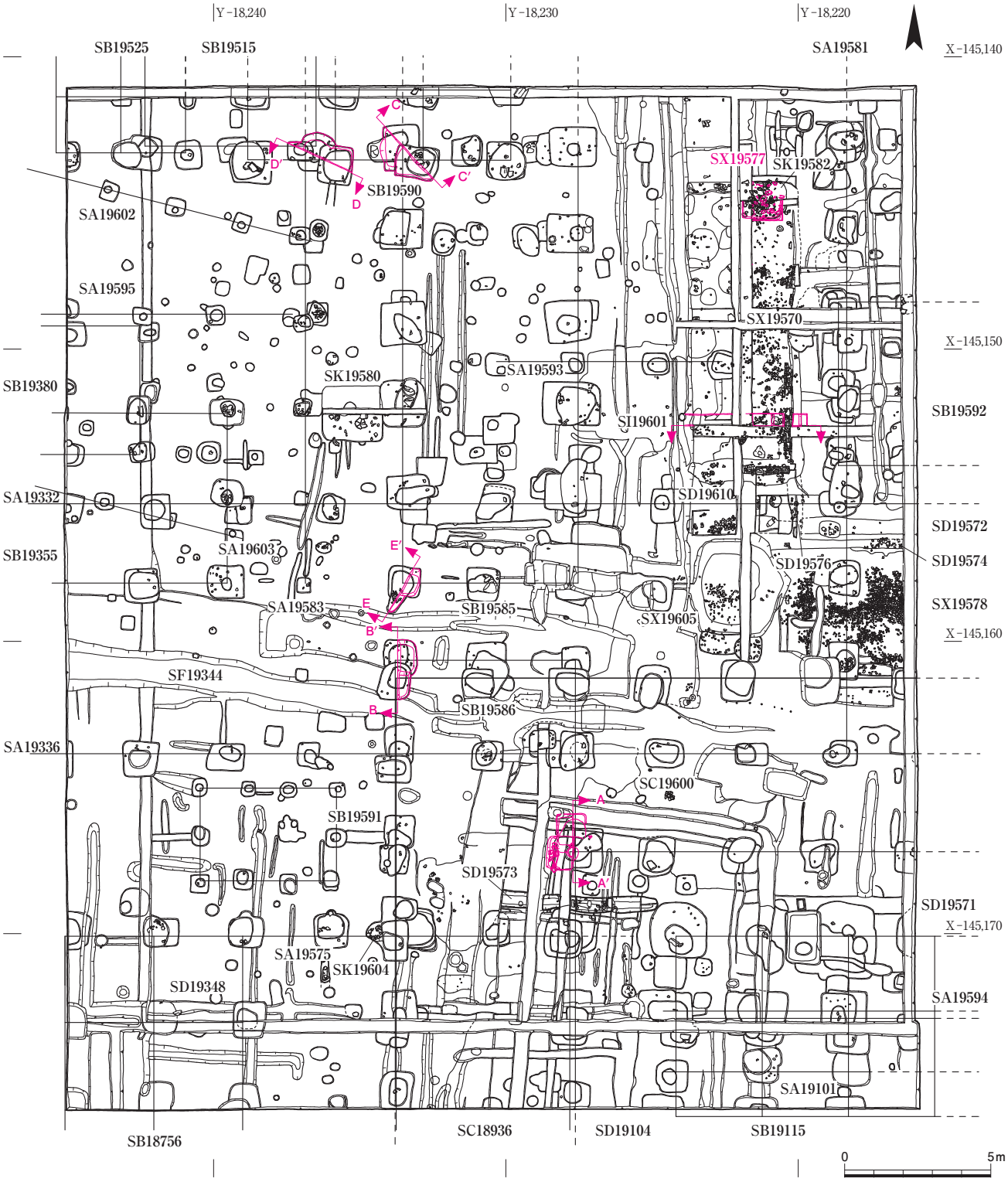
3　基本層序

調査区は旧水田の段差により、西側の低い面と東側の一段高い面に分かれる。調査区西側では、表土（厚さ約10㎝）、旧耕土・床土（20～30㎝）が堆積し、直下で黄褐色粘質土（地山）に達する。この黄褐色粘質土上面（標高約66.1m）で遺構検出をおこなった。

調査区東側では、表土（約10㎝）、平城宮跡整備盛土（20～25㎝）、旧耕土・床土（約50㎝）が堆積し、その下に奈良時代の整地土である褐色砂質土（10～55㎝）および古墳時代の遺物包含層である暗褐色粘質土（約10～25㎝）が堆積し、地山である黄褐色粘質土に達する。遺構検出は主に褐色砂質土上面（標高66.2～66.4m）においておこなった。

4　検出遺構

検出した遺構のうち奈良時代の遺構は、建物、塀、溝、土坑、壇状遺構などである（図Ⅲ-３）。このうち建物お



図Ⅲ-3　第503次調査区遺構図　1：200

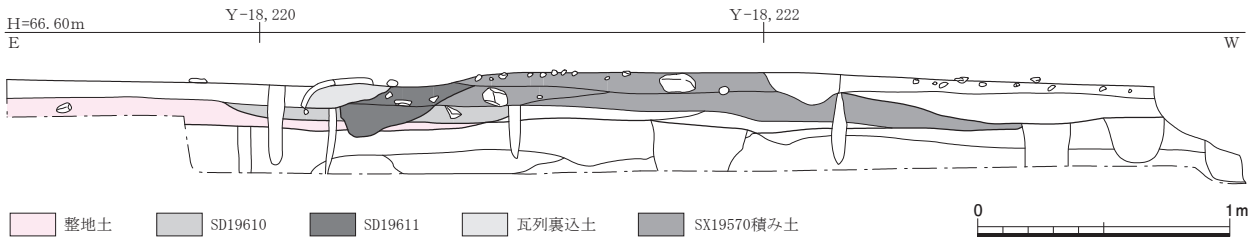
よび塀はすべて掘立柱の構造である。これらの各遺構は周辺の調査成果を併せて６期に区分できる。以下、各時期の遺構を古い順に記述し、さらに時期の位置づけが困難な遺構と奈良時代より前、奈良時代より後の遺構について記述する。

１期の遺構

南北棟建物SB18756　調査区西南で検出した桁行10間、梁行２間の南北棟建物。南の第423次調査区から続き、東北隅柱穴を新たに検出した。SB18756の北端には西側に桁行12間以上、梁行１間の回廊状東西棟建物SC19335が取り付き、東側には東西塀SA19575が取り付く。柱間は約3.0m（10尺）。

南北棟建物SB19515　調査区西北で検出した桁行10間、梁行２間の南北棟建物。北西の第481次調査区で西側柱列を検出しており、今回建物の南妻部分を検出した。この南妻は後述の東西塀SA19332から約12m（40尺）北側にあたる。柱間は約3.0m（10尺）。

東西溝SD19571　調査区東南で検出した東西溝。幅約



図Ⅲ-4　壇状遺構SX19750土層図　1：30

0.6m、深さ約20cmで、約５m分を検出した。SB19115の柱掘方と重複し、SD19571が古い。断面形状は逆台形を呈し、埋土に流水を示す砂などの堆積はみられない。長軸方向を南北に向けた状態の磚が数点出土しており、底に磚を敷いていた可能性がある。

東西溝SD19572　調査区中央東側で検出した東西溝。幅約0.5m、深さ約20cm。長さ約６m分を検出した。埋土に１～３cm大の礫を含む。

東西道路SF19344　後述の東西塀SA19332および東西塀SA19575に挟まれた幅約15m（50尺）の道路。調査区を東西方向に横断する。

なお、SF19344の東側で、東西溝SD19571から東西溝SD19572までの南北約12.5mの間には、特徴的な黄色砂質土を含む土が存在し、断面観察からはこの黄色砂質土と褐色砂質土を厚さ５～10cmの単位で積んだ状況が認められる。西辺は削平により確定できないが、道路にともなう何らかの施設の可能性がある。

東西塀SA19332　調査区中央で検出した東西塀。西の第446次調査区から続き、さらに調査区東へ続く。今回10間分を新たに検出した。柱間は2.8～3.0m。西から４基目の柱抜取穴とその周辺には土器が多く廃棄されていた。

東西塀SA19575　SB18756の東北隅に取り付く東西塀。４間分を検出したが、東端は後述の総柱建物SB19115や南北棟建物SB19586の柱穴と重複するため、あきらかでない。柱間は2.6～3.0m。

２期の遺構

総柱建物SB19525　調査区西北で検出した総柱建物。西側の第446・481次調査区でも検出しており、東西２間、南北３間となる。柱間は約2.1m（７尺）。

東西塀SA19101　調査区東南で検出した東西塀。調査区の東側へ延びる。第423次調査では北側へ展開する建物と考えていたが、今回北側で柱列が検出されなかったため、塀とみられる。柱間は約3.0m（10尺）。

３期の遺構

東西棟建物SB19380　調査区中央西側で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟建物。西側の第423次調査区から続き、規模が確定した。柱間は約2.4m（８尺）。

壇状遺構SX19570　調査区東北で検出した（図Ⅲ-４・５）。外周に幅約0.8m、深さ約15cmの溝SD19610をコの字形にめぐらせ、この溝の埋没後に平瓦を、凸面を上にして長軸方向に並べる。平瓦は外側の側面が接地するように傾斜させて並べており、平瓦を設置する時点で、内側に高まりがあったことを示す。また、瓦列内側の土は５～10cm前後の礫や瓦片を多く含み、外側とは土の状況が異なる。以上の状況から、この遺構は壇状をなし、外装に平瓦を用いた可能性が考えられる。平瓦列は亀腹状の土壇を保護するために並べたとみられる。現存する高さは最大で14cmほどである。規模は、北側の瓦列が残っていないため、瓦列外周の溝の端で測ると南北約10.5m、東西は西側が旧水田により削平されており、3.2m以上となる。断割調査によると、SD19610を掘り、水成堆積を示す砂で埋没した後に土を積んで壇を築成し、その後再度外周に溝SD19611を掘って平瓦を据えた過程が観察される（図Ⅲ-４）。壇状遺構にともなう礎石の据え付け・抜き取りの痕跡や柱穴などは検出されていない。

SX19570の外周溝SD19610と接続する南北溝SD19576・東西溝SD19574が１期の東西溝SD19572よりも新しいこと、SX19570南側の東西方向の瓦列が、東西棟建物SB19380の南妻と揃うことから３期の遺構に位置づけた。SX19570の東北部は、５～15cm大の石を多く含む土坑SK19582により壊されている。この土坑を掘り下げた壇状遺構の下層で柱穴SX19577を検出した。一辺約1.3mで、深さ約140cmである。埋土に礫を多く含む。

東西溝SD19574　調査区中央東側で検出した東西溝。幅約0.3m、深さ15cmで埋土に砂と１～３cm大の礫を含む。調査区の東側へさらに続き、西は大土坑SX19605に壊され不明である。調査区東壁から約４m付近で南北溝SD19576とＴ字状に接続する。

南北溝SD19576　調査区中央東側で検出した南北溝。幅約0.6m、深さ約10cmで埋土に灰色砂質土を含む。南側で東西溝SD19574と接続し、北側では壇状遺構SX19570南の東西方向の平瓦列を据えた外周溝SD19610に接続する。東西溝SD19572と重複し、SD19572を埋め、整地した後にSD19574・SD19576を掘削する。

礫敷SX19578　調査区中央東側で検出した。南北約3.0

図Ⅲ-５　壇状遺構SX19750（南東から）

図Ⅲ-６　方形土坑SK19580・南北棟建物SB19585（北から）

m、東西約4.2mの範囲に分布し、調査区の東側へさらに広がるとみられる。北側に５～10cm大の礫を密に敷くが、南側の礫はやや細かく、分布も粗い。

方形土坑SK19580　調査区中央西寄りで検出した土坑。南北棟建物SB19585の柱穴と重複し、SK19580が古い。東西約2.3m、南北約2.0mで、深さ約20cmである。灰色粘質土で埋められている。須恵器杯Ｂ１点と大型Ⅲ Ａ２点が出土した（図Ⅲ-６）。

４期の遺構

総柱建物SB19115　調査区東南で検出した総柱建物。南北２間、東西３間以上である。南の第423次調査区から続き、調査区の東へさらに展開する。北側柱列の柱掘方は一辺約1.5～２m、深さ約120cmと大きく、埋土に黄色砂質土を含む特徴がある。柱間は約3.0m（10尺）。柱抜取穴からは磚が多く出土し、北側柱列西から３基目の柱穴には柱根が遺存していた（図Ⅲ-８）。柱根は残存長約75cm、直径約35cmで、エツリ穴を穿つ。

東西棟建物SB19355　調査区中央西側で検出した桁行５間、梁行２間の東西棟建物。西の第446次調査区から続く。今回新たに東妻部分を検出し、規模が確定した。柱間は約3.0m（10尺）。

南北棟建物SB19585　調査区中央で検出した南北棟建物。桁行６間以上、梁行２間で調査区の北へさらに展開する。柱間は約3.0m（10尺）である。柱の掘方が一辺1.5～２mと大きく、掘方の形状が横長のものと正方形に近いものがある。埋土に礫を多く含む特徴があり、柱抜取穴から磚、凝灰岩、根石などに使用された安山岩が出土した。また、南西隅柱の柱穴は一辺約1.0mとやや小さく、柱抜取穴から瓦が多量に出土した（図Ⅲ-７-Ｅ）。南妻の柱筋がSB19355の南妻と揃う。

東西塀SA19336　調査区中央で検出した東西塀。西の第446次調査区から続く。今回新たに９間分を検出し、調査区の東へさらに延びる。総長22間（約67m）以上にわたる塀である。柱間は約3.0m（10尺）。

南北塀SA19581　調査区東側で検出した南北塀。７間分を検出した。南側は東西塀SA19336に取り付き、調査区の北へさらに延びる。３期の礫敷SX19578を壊しており、柱の抜取穴に瓦を多く含む特徴がある。柱間は約3.0m（10尺）。

南北塀SA19583　調査区西側で検出した南北塀。５間分を検出し、調査区北へさらに展開するとみられる。柱掘方が一辺0.5～0.6m前後、深さ30cmと小さい。埋土に炭片を含む特徴がある。柱間は約3.0m（10尺）。南北棟SB19585と柱筋を揃え、SB19585の西側柱筋からの距離は約3.4mである。

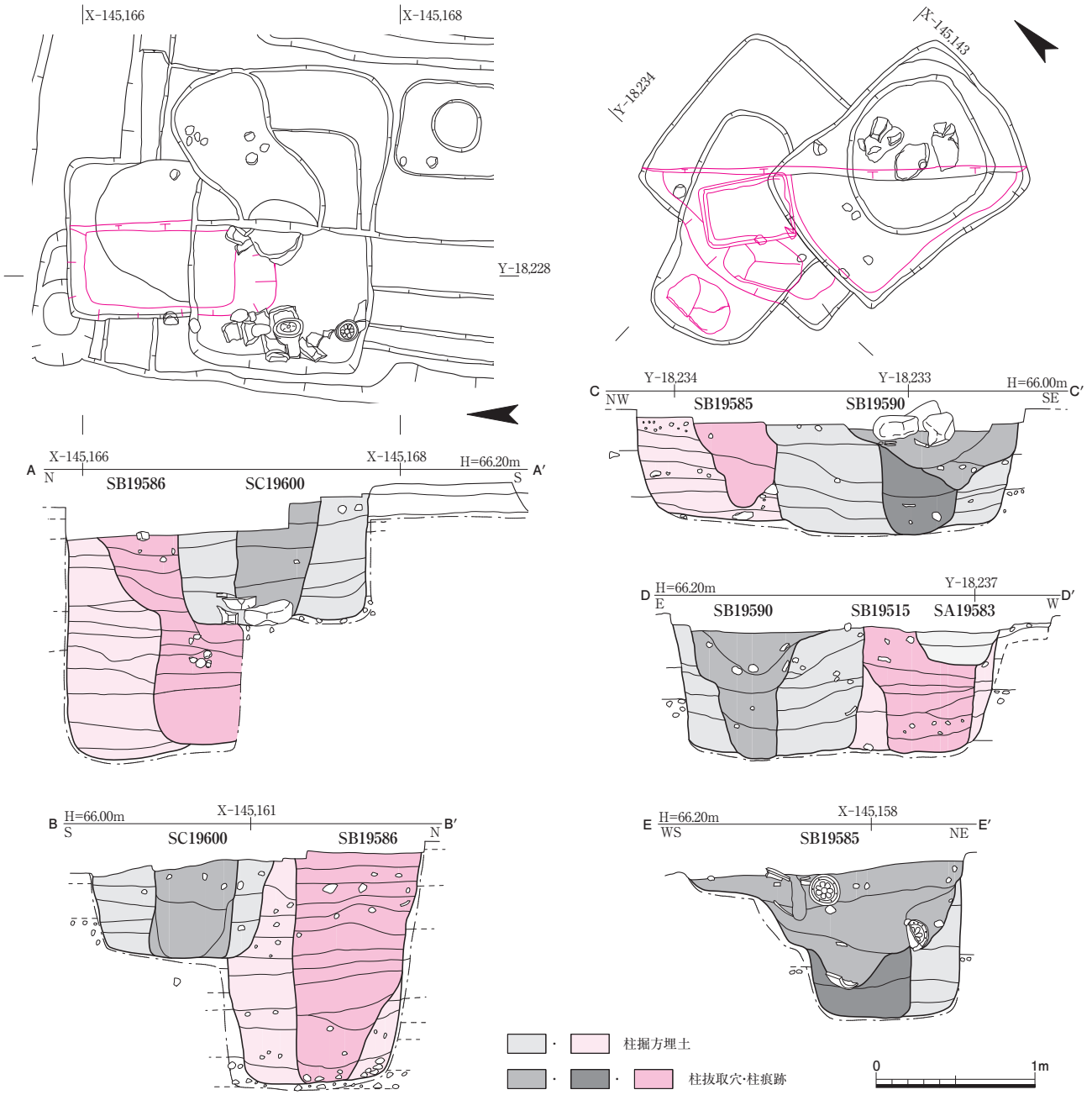
５期の遺構

南北棟建物SB19586　調査区中央南側で検出した南北棟建物。桁行５間以上、梁行２間。後述する６期の回廊SC18936・SC19600と重複する。柱間は約3.0m（10尺）。断割をおこなった柱穴はいずれも深さ約110～150cm前後と深い。また、６期の回廊柱穴と重複する北妻柱では、柱抜取穴を厚さ５～10cmの単位で黄色粘質土と褐色砂質土を互層に丁寧に埋め戻す（図Ⅲ-７-Ｂ）。南妻柱は検出できず、南の第423次調査区に展開する可能性が高い。

総柱建物SB19590　調査区北側で検出した総柱建物。東西３間、南北１間分を検出し、調査区の北へさらに展開する。柱穴は一辺1.3～1.5mで、深さ70～80cm、柱間は約3.0m（10尺）。柱抜取穴に瓦を多く含む特徴があり、凝灰岩製の羽目石と葛石が出土した（図Ⅲ-７-Ｃ）。４期の南北棟建物SB19585より新しく、柱抜取穴から出土した瓦から５期に位置付けた。

６期の遺構

回廊SC18936・SC19600　調査区南側で検出した回廊。南の第421・423次調査区で検出した南北に長い建物



図Ⅲ-7　柱穴断割土層図　1：40

図Ⅲ-8　総柱建物SB19115柱根出土状況（東から）

図Ⅲ-9　土坑SK19604土器出土状況（北西から）

SB18936が調査区中央で東に折れ、回廊であることが新たにわかった。これにより、遺構記号をSCと変更する。SC18936の南北の規模は18間（約54m）である。東西方向のSC19600は６間（約18m）分を検出し、調査区の東にさらに展開する。柱間は桁行約3.0m（10尺）で、梁行約6.0m（20尺）となる。柱穴は一辺約1.2mで、深さ80㎝。内側柱の北西隅柱穴は40㎝大の石を礎盤として置き、周囲を瓦・磚で囲む（図Ⅲ-７-A）。なお、第423次調査ではSC18936北半部で床束を検出し、床張建物であるとしたが、本調査区内では確認できなかった。

時期不明の遺構

東西棟建物SB19591　調査区西南で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟建物。柱掘方は一辺0.5～0.6m前後、深さ30㎝で、柱間は約1.5m（５尺）。

東西棟建物SB19592　調査区東北で検出した桁行２間以上、梁行２間の東西棟建物の西妻部分とみられ、調査区の東へさらに展開する。柱間は南北約2.7m（９尺）、東西約2.4m（８尺）である。４期の南北塀SA19581より古い。

東西塀SA19593　調査区中央で検出した３間の東西塀。柱間は中央が約2.7m（９尺）で東西両端が約2.4m（８尺）である。３期とした壇状遺構SX19570を壊した後に造られた塀であり、４期の南北棟SB19585とも共存し得ないことから５期以降とみる。

東西塀SA19594　調査区東南で検出した３間以上の東西塀。調査区の東へさらに延びる。柱抜取穴に瓦を多く含む。柱間は約3.0m（10尺）。４期の総柱建物SB19115より新しい。

東西塀SA19595　調査区中央西側で検出した５間の東西塀。西側の第446次調査区から続く。柱間は約2.5mである。南北塀SA19583と重複し、４期以前と考えられる。

東西溝SD19573　調査区南側で検出した幅約0.5m、深さ約15㎝の東西溝。長軸方向を南北に向けた状態の磚が数点出土しており、底石として敷かれていた可能性がある。溝の形状や磚の出土状況は東約４mに位置する１期の東西溝SD19571と似るが、５期の南北棟建物SB19586よりも新しい。回廊SC18936を横断する暗渠状施設の可能性がある。

東西溝SD19348　調査区南側で検出した東西溝。幅約0.3～0.4m、深さ約15㎝。埋土に炭・土師器片を含む。第446次調査区から続き、第423次調査区から続く南北溝SD19104と重複する。南北棟建物SB19586、回廊SC18936より新しい。

奈良時代より前の遺構

竪穴建物SI19601　調査区中央で検出した。南北約3.2m、東西約3.4mで、西側に張り出し部がある。竪穴建物とみられるが削平によりカマドの位置などは不明であった。

斜行塀SA19602　調査区西北で検出した方位が西で約15度北にふれる塀。西の第446次調査区でも検出しており、４間分の塀となる。柱間は約2.4m（８尺）。

斜行塀SA19603　調査区中央西側で検出した方位が西で約15度北にふれる塀。斜行塀SA19602の南約10mに位置する。東西塀SA19332と重複し、SA19603が古い。西の第446次調査区でも検出しており、５間分の塀となる。柱間は約2.4m（８尺）。

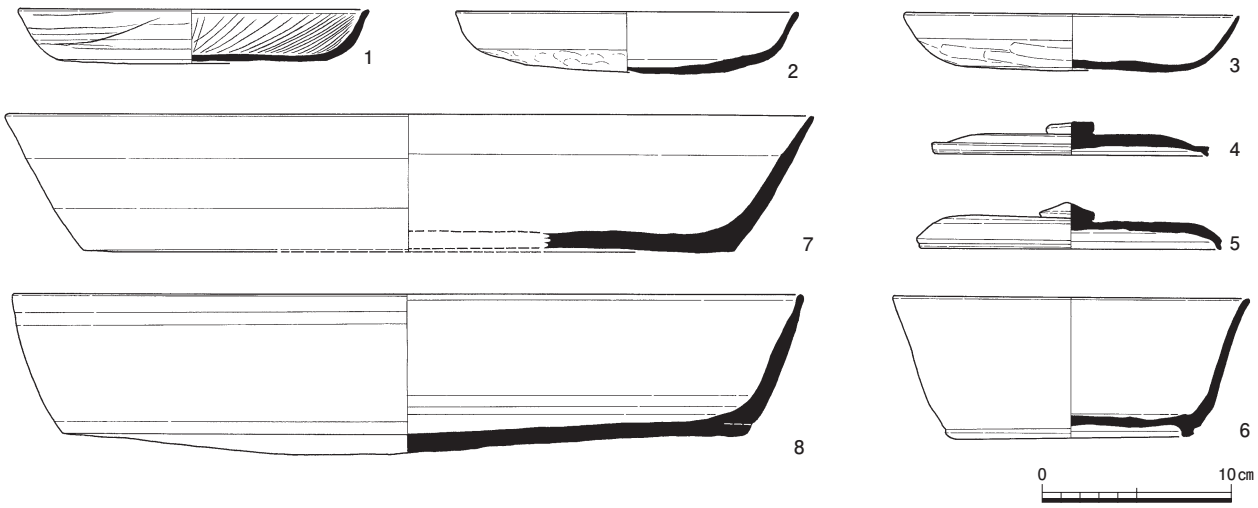
土坑SK19604　調査区中央南側で検出した小型の円形土坑。径約0.6m、深さ50㎝で、土師器甕・壺・椀、須恵器甕と５～30㎝大の礫が詰まった状態で出土した（図Ⅲ-９）。古墳時代後期の遺構である。

奈良時代以後の遺構

瓦敷SX19579　調査区中央東側で検出した。南北約10m、東西約６mの範囲に平瓦・丸瓦の破片が集中的に分布する。礫敷SX19578の上面や回廊SC19600の柱抜取穴を覆う。平安時代以降の遺構と考えられる。

大土坑SX19605　調査区中央東側で検出した大型の土坑（図Ⅲ-10）。二段の掘り込みがあり、上段は南北約3.5m東西約2.7mの隅丸方形で、深さ80㎝、下段は土坑南

図Ⅲ-10　大土坑SX19605（西から）



図Ⅲ-11　第503次調査出土土器　1：4

寄りに南北約1.2m、深さ60cmの掘り込みをおこなう。下段の埋土には植物質などの有機質遺物を多く含み、下段が埋まった後、上段底面に砂層が堆積する。この砂層上に、黒色粘質土で一気に埋め立てた状況が認められるが、埋め立ての最初の段階にあたる黒色粘質土最下層から、北宋銭ほか銭貨11枚が出土した。銭貨は標高65.30～65.40mの範囲から出土し、出土位置も近接するが、複数枚が連なる様相は認められず、ばらまかれたような状況を示す。最上層の掘方埋土は茶褐色粘質土で礫を多く含む。これら各層の埋土および有機質遺物については自然科学分析を依頼中である。　**（小田裕樹）**

5　出土遺物

土 器 類

整理用コンテナ37箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器が大半で古墳時代、中世の土器を一部含む。平安時代の土器はほとんどみられない。

図Ⅲ-11、1は東西溝SD19574出土の土師器杯A。口縁端部を丸くおさめる。内面に一段放射暗文とラセン暗文を施し、外面はa1手法である。2～4は南北塀SA19581の柱抜取穴から出土した。2は土師器杯C。丸底気味の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。外面調整はa0手法。3は杯A。平底の底部からやや内弯気味に口縁部が立ち上がる。外面調整はc手法。4は須恵器杯B蓋。平坦な頂部から屈曲して口縁部が伸びる。口縁端部は小さく下方に折り曲げる。頂部外面にロクロ削り調整を施し、中心にボタン状のつまみを貼り付ける。5は東西塀SA19332の柱抜取穴出土。平坦な頂部から口縁部が緩やかに降る。口縁端部を短く折り曲げ、強い横ナデ調整を施す。頂部外面にロクロ削り調整を施し、中心に径2.9cmの宝珠つまみを貼り付ける。6～8は方形土坑SK19580出土。6は須恵器杯B。口縁部が外反しつつ立ち上がる。底部外寄りに低い高台を貼り付ける。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。7・8は大型の須恵器ⅢA。これほどの大型品は他に例を見ず、盤の可能性もある。7は平底の底部から口縁部が直線的に立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。底部外面と口縁部外面下位にロクロ削り調整を施す。口径42.7cm。8はやや丸みをもった底部から、内弯気味に口縁部が立ち上がる。口縁端部に横ナデ調整を施し、丸くおさめる。径約36cmの粘土円盤で底部をつくり、その上に口縁部の粘土を積むため、底部と口縁部の境に段がつく。口縁部外面下位にロクロ削り調整を施す。口径41.8cm。

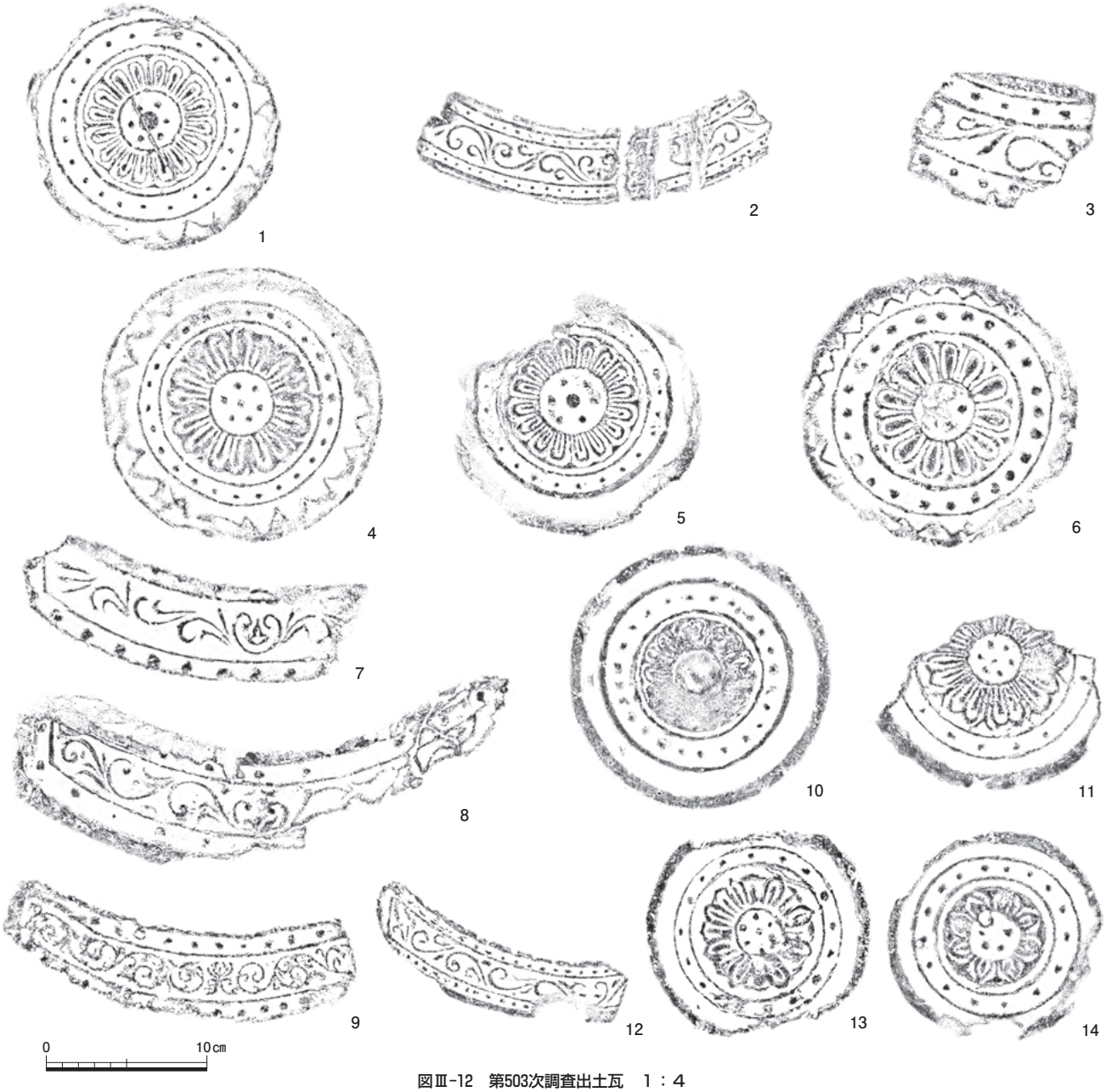
瓦 磚 類

第503次調査出土の瓦磚類は表Ⅲ-1のとおり。100㎡

表Ⅲ-1　第503次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6131	A	1	6663	A	9	丸瓦(刻印)	1
6133	C	1		B	3	平瓦(刻印)	1
6138	B	2		C	1	磚(緑釉)	2
6144	A	1		?	2	面戸瓦	2
6151	A	5	6664	D	2		
6282	C	1	6688	A	1		
	E	1	6691	A	1		
	G	1	6695	A	1		
6284	E	5	6719	A	2		
	?	1	6721	E	1		
6285	?	1		G	4		
6308	A	2		H	1		
6311	A	1		?	4		
	B	2	6726	?	1		
6313	?	1	6732	A	2		
6314	A	1		?	1		
型式不明(奈良)		30	6760	A	1		
時代不明		1		?	1		
			6768	B	1		
			型式不明(奈良)		10		
			中世		1		
計		58	計		50	計	6

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩
重量	216.234kg	668.893kg	87.482kg	145.137kg
点数	2407	11539	43	71



図Ⅲ-12　第503次調査出土瓦　1：4

あたりの瓦出土量は87.2kgで、南方の第423次調査区の43.3kg、西方の第446次調査区の44.8kgの約２倍。一方、第446次調査区北方の第469次調査区では100㎡あたり333.0kgで、その1/3程度となる。これまでの東院地区の調査では第469次調査での瓦の出土量が特に多かったが、第503次調査は周辺の調査と第469次調査との中間的な様相といえる。ただし、本調査区での瓦の出土量は検出した建物遺構数を考えれば決して多くは無く、本調査区内で総瓦葺建物の存在は考えにくい。調査区ごとの単純な比較検討の有効性は判断が難しいが、本調査区より北方に総瓦葺建物など瓦の使用量の多い建物の存在の可能性が指摘できる。なお、磚の出土量では、第503次調査の87.482kgは第469次調査の80.675kgを上回り、周辺の調査区と比較してあきらかに多い。磚を底に敷いた溝や磚を用いた何らかの施設の存在も想定できるがその詳細な使用法は不明である。緑釉磚も２点出土している。

出土した軒瓦は平城宮瓦編年のⅠ－１期からⅣ－２期におよぶ。型式の種別が判明したものでは、Ⅰ期は３点と少なく、Ⅱ期が全体の半数近い24点、Ⅲ期が11点、Ⅳ期が12点で、Ⅴ期のものはない。これまでの東院地区の調査と同様にⅡ期の軒瓦が多い。Ⅳ－２期の6151A－6760Aの組合せは東院玉殿所用瓦とされ緑釉のものも知られるが、本調査では施釉のものはない。以下、各遺構から出土した軒瓦を中心に報告する。

１期～３期の遺構出土の軒瓦はない。

４期のSA19581の柱抜取穴からは図Ⅲ-12、１・２（6284Eb、6721G）などが出土。出土軒瓦の時期はⅠ－１期からⅢ－１期である。SB19585の柱掘方からは３（6664D）

が、柱抜取穴からは４（6311B）が出土。いずれもⅡ－１期である。SB19355の柱抜取穴からはⅢ－１期の５（6282G）が出土。

５期のSB19590の柱抜取穴からは６～９（6138B、6695A、6732A、6760A）が出土。出土軒瓦の時期はⅢ－１期からⅣ－２期である。SB19586の柱抜取穴からはⅢ－１期の10（6282E）が出土。

６期のSB18936の柱掘方からは11（6285A）が、柱抜取穴からは12（6721E）が出土。SC19600の柱掘方からは13・14（6151A、6314A）などが出土。出土軒瓦の時期はⅡ－１期からⅣ－２期である。　**（川畑　純）**

６　遺構変遷

今回の調査で検出した各遺構の変遷を整理する（図Ⅲ-13）。

１　期　東西方向の２条の塀SA19332・SA19575に挟まれた範囲は西から続く東西方向の通路SF19344である。この通路により、東院西北部は南北に区画される。東西溝SD19571・SD19572は塀のやや内側にあり、調査区東端で検出したこれらの溝に挟まれた範囲の特徴的な土を基壇土とすれば、これが通路に開く門などの施設の基壇であった可能性がある。門であった場合、調査区の東方に中枢施設が展開していたことが考えられる。

２　期　調査区の南方を中心に総柱建物や四面廂建物が建ち並ぶが、今回の調査区では小規模な総柱建物SB19525が建つほか、同時期の建物は少ない。

３　期　平瓦を外装に用いる壇状遺構SX19570が造られる。この時期の中枢部は調査区の南東方に位置する回廊SC19112・SC19113に囲まれた区画と推定され、内部には四面廂建物や南北棟建物が建つことがあきらかになっている。今回の調査で検出した壇状遺構はこの中枢部の背後にあたる。

４　期　東西塀SA19336を建て、南北を区画する。SA19336の北側は東西棟建物と南北棟建物が建ち並ぶ区画であり、この塀に取り付く南北塀SA19581により、さらに細かく空間を区画する。このうち、南北棟建物SB19585は大型の柱掘方をもつが、第446次調査区でSB19585と南妻を揃える大型の南北棟建物SB19350を検出しており、両者の関連性が注目される。またSB19585は東西棟建物SB19355とも南妻を揃え、両建物間に南北塀SA19583を配する。SA19336より南側では総柱建物SB19115などが建ち、北側とは異なった空間利用がなされる。これらの４期建物群は柱筋が揃う特徴がある。

５　期　東西塀SA19336を廃し、南北棟建物SB19586や総柱建物SB19590が建つ。この時期の建物配置に規則性は認めがたい。５期の中枢部は調査区の南東方に位置する回廊SC19050[6]に囲まれる空間と想定されており、また、調査区の西方では大規模な総柱建物が南北に整然と建ち並ぶことが判明している。今回の調査区は両者の間に位置し、異なった空間利用がなされていたと考えられる。

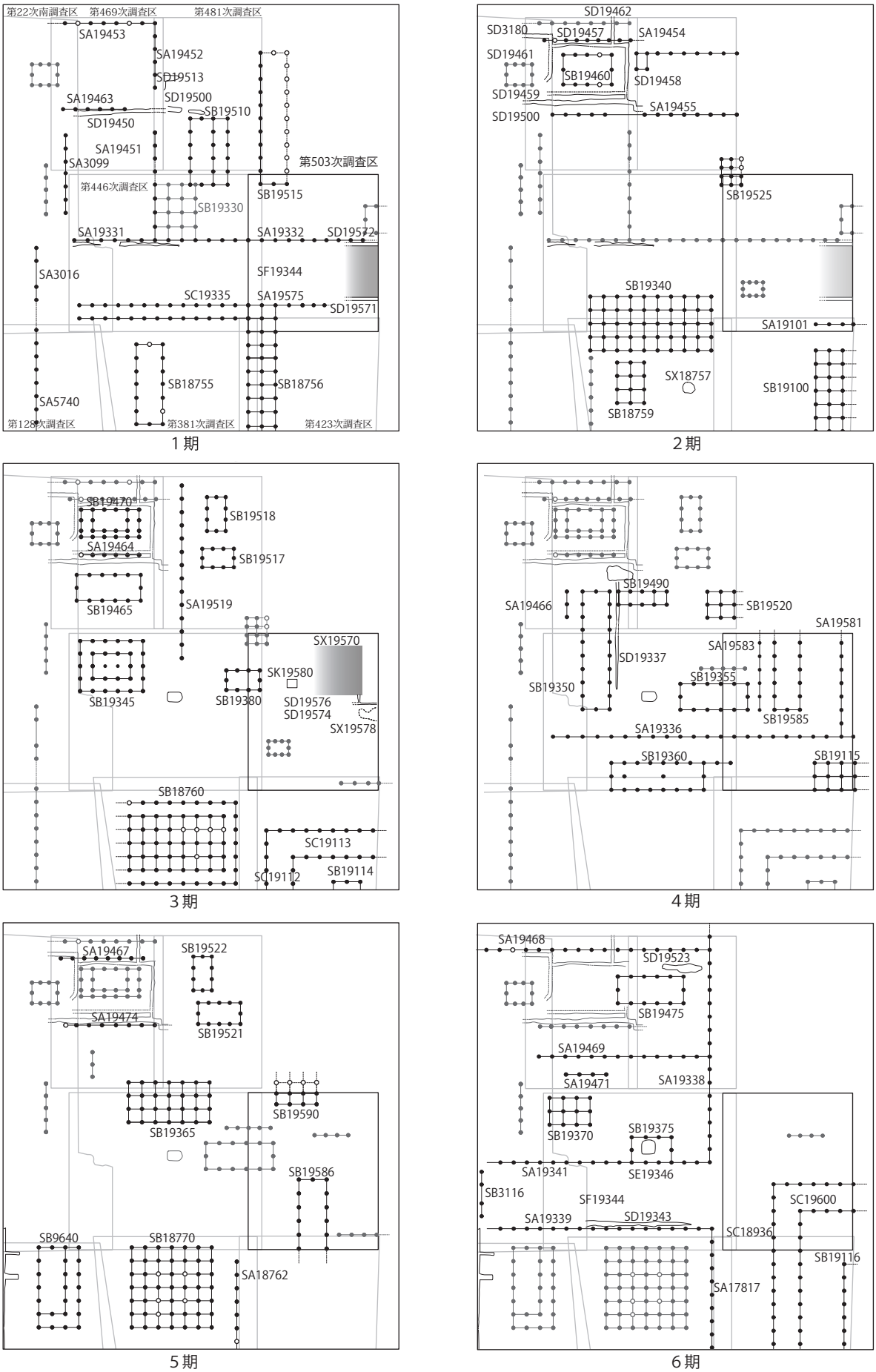
６　期　中枢施設を取り囲む回廊SC18936・SC19600が造られる。この回廊および回廊に囲まれた空間については次節で検討する。東院西北部では掘立柱塀による南北約47.2m（160尺）の区画が南北に整然と並び、中枢部との区画の違いが明瞭となる。これらの区画間は幅約13.5mの南北通路となり、東西方向の通路と接続する。

７　東院６期遺構群について

今回の調査では、回廊SC18936・SC19600を検出し、６期の東院中枢部が掘立柱の単廊で区画されていたことがあきらかになった。また、回廊の北西隅を検出したため、当該期の中枢施設が調査区南東に位置することが推定できるようになった。東院６期は奈良時代末の宝亀年間（770～780）頃に比定されている。今回の調査でも回廊SC18936の柱堀方底面にⅣ－２期の軒瓦が敷かれていたことから、この年代観とは矛盾しない。奈良時代末頃、東院地区には宝亀４年（773）に完成した光仁天皇の「楊梅宮」があったと考えられ[7]、今回検出した回廊は、この「楊梅宮」を区画する施設である可能性が高い。既往の調査成果をふまえ、６期遺構群を整理し「楊梅宮」の構造について検討する。

６期遺構群の再検討　回廊SC18936は第401・423次調査区から続く一連の建物である。また、SC18936の南側には桁行10間、梁行２間の南北棟建物SB18935が存在する。両建物は柱筋が揃う点や10尺の柱間寸法による柱配置などからみて、一連の回廊と判断される。

次に、この回廊に囲まれた内部に存在する建物群を抽出する。従来の調査でも指摘されてきた回廊との柱筋や10尺の造営尺の共通性に加え、６期遺構は奈良時代にお


第22次南調査区
第469次調査区
第481次調査区
SA19453
SA19452
SD19513
SA19463
SD19500
SB19510
SD19450
SA19451
SA3099
第503次調査区
第446次調査区
SB19515
SB19330
SA19331
SA19332
SD19572
SA3016
SF19344
SC19335
SA19575
SD19571
SB18755
SB18756
SA5740
第128次調査区
第381次調査区
第423次調査区
1期
SD19462
SD3180
SD19457
SA19454
SD19461
SB19460
SD19458
SD19459
SA19455
SD19500
SB19525
SB19340
SA19101
SX18757
SB19100
SB18759
2期
SB19470
SB19518
SA19464
SB19517
SB19465
SA19519
SX19570
SK19580
SB19345
SB19380
SD19576
SD19574
SX19578
SB18760
SC19113
SC19112
SB19114
3期
SB19490
SA19466
SB19520
SA19581
SA19583
SD19337
SB19355
SB19350
SB19585
SA19336
SB19360
SB19115
4期
SA19467
SB19522
SA19474
SB19521
SB19590
SB19365
SB19586
SB9640
SB18770
SA18762
5期
SA19468
SD19523
SB19475
SA19469
SA19471
SA19338
SB19370
SB19375
SA19341
SE19346
SB3116
SF19344
SC19600
SA19339
SD19343
SC18936
SB19116
SA17817
6期

図Ⅲ-13　遺構変遷図

表Ⅲ-2　楊梅宮関係略年表

年（西暦）	月日	事　項
宝亀３（772）	12.23	**楊梅宮**において、彗星出現の災厄を除くため、僧百人を呼んで斎会を行う。
宝亀４（773）	2.27	高麗朝臣福信が造宮卿として造営を担当した**楊梅宮**が完成し、天皇が**楊梅宮**に移る。
宝亀５（774）	1.16	天皇が**楊梅宮安殿**に出御し、五位以上に対して踏歌の節の宴を催す。また、出羽の蝦夷・俘囚に対しては、朝堂において饗宴を催す。〈年中行事抄〉
宝亀６（775）	1.7	天皇が**楊梅宮安殿**に出御し、五位以上に対して、白馬の節の宴を催し、衾を賜る。〈袖中抄ほか〉
宝亀８（777）	6.18	**楊梅宮南池**に一茎二花の蓮が生える。

※特記以外は『続日本紀』による

ける遺構群の中でもっとも新しい遺構であることから、遺構の重複関係でもっとも新しいものを条件とした。

その結果、第401・423次調査で検出した桁行７間の南北棟建物SB19116、桁行15間以上、梁行２間の南北棟建物SB18916、第421次調査で検出した桁行９間、梁行３間で床束をもつ可能性がある北廂付きの東西棟建物SB19090、東西塀SA19045が回廊に囲まれた空間内部を構成する建物と考えられる。

既調査所見の変更点　既往の検出遺構の解釈について、以下の点を変更する。第401次調査では回廊SC18936とSB18935間の距離を5.7m（19尺）とみたが、柱抜取穴など柱位置で再計測すると6.0m（20尺）と判断される。これは回廊間の馬道にあたると考えられる。次に、SB18935は、東南隅柱に東へ２間、北へ６間の逆Ｌ字形の廂SA18941が取り付くとされる。しかし、『紀要2007』でも指摘するとおり、類例の乏しい廂付建物とするよりも、SB18935とSA18941は別遺構とみて、SA18941の南北柱列およびSB18935に取り付く１基の柱穴は第401次調査区の南方へ続く別遺構を構成する可能性を考えたい。

また第401次調査では、南北棟建物SB18916と南北棟建物SB18935について、東西溝SD18927がSB18916より後出し、SB18935より先行するとして、別時期の遺構とする。これは、SD18927が東区でSB18916と、西区でSB18935と重複し、それぞれの前後関係をもとに遺構の時期を位置づけているが、SD18927は東区では石組溝、西区では元来素掘溝であったとされ、東西で同じ溝であるかどうかは、検討の余地が残る。今回の再検討ではSD18927を東西で別の遺構とみて、SB18916とSB18935を同時期の遺構とみた。SB18916は重複する奈良時代の建物の中ではもっとも新しい建物である。

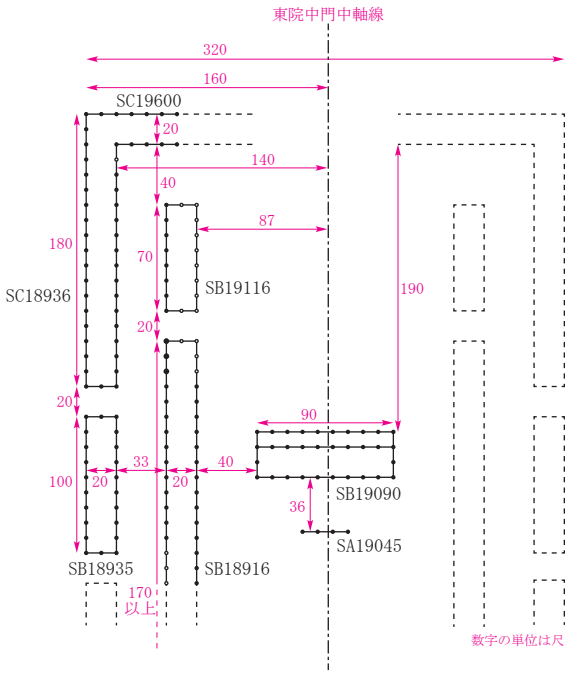
６期遺構群の建物配置　以上を踏まえた上で建物配置を検討する。東西棟建物SB19090の中軸が東院中門のＣ期礎石建物[8]の中軸線とほぼ一致することから、抽出した遺構群は東院中門の中軸を基準とする建物配置計画で割り付けられたと判断される。そこで、これらの建物を東院中門中軸線で対称の配置になるとみて折り返すと図Ⅲ-14のような建物配置が復元できる。

６期の中枢施設は、東西約96m、南北約90m以上の回廊で囲まれた空間と考えられる。回廊に囲まれた内側では、南北棟建物２棟ずつと中軸線上に東西棟建物と塀を配置する。中軸線上の東西棟建物SB19090は北廂をもつ建物であり、北方に相対する建物の存在が推測される。

「楊梅宮」と６期遺構群　「楊梅宮」に関連する記事（表Ⅲ-2）をみると、楊梅宮は宝亀４年（773）に高麗朝臣福信の造作により完成し、正月節会などに際して五位以上らに宴する施設であったことがわかる。これらの史料から、楊梅宮は天皇が御する「安殿」があり、出羽の蝦夷・俘囚を饗す「朝堂」を有した構造とみられる。

以上をふまえると、今回復元した回廊に囲まれる６期遺構群は、「楊梅宮」の「安殿」を取り巻く施設または「朝堂」に関わる施設の２つの可能性が考えられる。

「安殿」とみる場合、北廂をもつSB19090に相対する正殿建物が回廊に囲まれた空間内に存在すると考えられる。また、今回の調査区東方、回廊に囲まれる空間の北方には、南北約45～50m、東西約62mの大きな畦畔（巻頭図版７上、図Ⅲ-２点線範囲、現在は仮整備されている。）がある。この大型畦畔が正殿を囲む区画を反映する遺存地



図Ⅲ-14　東院６期遺構群復元案　１：1,500

割とみて、現在の水路を境に、２つの区画が対置する構造も考えられる。この場合、今回復元した回廊に囲まれる空間が楊梅宮の「朝堂」であり、大型畦畔の部分に「安殿」に関わる施設が存在すると考えられる。

これらの詳細は今後の調査に拠るところが多く、回廊に囲まれた内部施設や周辺の調査をふまえ、「楊梅宮」の実態をあきらかにする必要がある。

東院地区における単廊による区画　回廊SC18936・SC19600は掘立柱の単廊である。梁行約6.0m（20尺）の異例の規模であり、同様の単廊は東院３期（４期までおよぶ可能性がある）の中枢施設を囲む回廊SC19112・SC19113のみである。また、東院５期の中枢施設を囲む回廊SC19050も梁行は約3.0m（10尺）であるが掘立柱の単廊である。これらから、東院地区の中枢部では３期以降、規模や位置を変えながらも、掘立柱の単廊で区画する施設が建てられていたことがあきらかになった。これは、複数回の建て替えにも関わらず、掘立柱の単廊で囲まれた空間が継続的に使用されたことを示し、３～５期の中枢施設群と６期遺構群との連続性を示唆する。「楊梅宮」以前に東院地区では「東院」や「東院玉殿」の存在が考えられており、これらの施設群の構造や性格を考える上でも重要な手がかりになると考えられる。

８　まとめ

第503次調査の主な成果は以下の通りである。

南の第401・423次調査区で検出した長大な南北棟建物が、東西方向へと続く掘立柱の単廊であることがあきらかになった。これは６期の中枢部を区画する回廊SC18916・SC19600であり、その北西隅を確認したこととなる。これにより、６期の東院中枢部が回廊に区画されていたこと、中枢施設が今回の調査区の南東側や北東側に位置することが考えられるようになった。

また、東院地区の中枢部では、３期以降、複数回の建て替えにも関わらず、単廊形式の回廊で区画する施設が建てられていたことがあきらかになった。これは、規模や位置を変えながらも、回廊で囲まれた空間が継続的に使用されていたことを示し、儀式や饗宴の場として利用された東院地区中枢部の性格の一端を示唆する。

次に、平瓦を外装とする壇状遺構SX19570を確認した。平城宮内において、平瓦を外装とする壇状遺構の検出は初めてである。亀腹状の土壇を保護するための手法とみられる。SX19570については、礎石の据え付け・抜き取り痕跡など建物の柱位置に関する痕跡はなく、上部構造は不明である。また、規模が比較的小規模であり、性格については、さらなる検討が必要である。

最後に、今回の調査では、東院地区西辺部と、回廊に囲まれる中枢部との空間利用の違いがあきらかになり、両者の規模や建物配置が時期により変化していることがあきらかになった。また、６期遺構群は東院中門との中心軸を揃える建物配置であるが、５期以前では、東院中軸と建物配置とは対応していないこともあきらかになった。これは東院地区内部の配置計画を復元する上で重要な事実である。これらの成果は、東院地区全体の空間利用の実態を解明する上で重要な手がかりとなる。今後も継続的な調査を積み重ねることで、東院地区の歴史的意義がより明確になることが期待される。　**（小田）**

註

１）「東院地区の調査―第401次」『紀要2007』。
２）「東院地区の調査―第421・423次」『紀要2008』。
３）「東院地区の調査―第446・469次」『紀要2011』。
４）前掲註２。
５）「東院地区の調査―第481次」『紀要2012』。
６）前掲註１。
７）岩本次郎「楊梅宮考」『甲子園短期大学紀要』10、1991。
８）「東院地区の調査　第243・245-1次」『平城概報1993』。

図Ⅲ-15　回廊SC18916・SC19600（北西から）